

私のおすすめ

クイズ、謎解き、脱出ゲーム

根岸 晶

根岸皮膚科（小田原市）

最近50歳をこえ、頭の働きが鈍るのをひしひしと感じています。仕事でも日常生活でも咄嗟にうまい言い回しが出ず、脈絡もなくとんちんかんなことを言ってしまいます。

そんな私ですが、頭を使うクイズは大好きです。この分野はテレビ界でも人気らしく、毎日どこかしの局で番組が放送されています。東大生がすごい難問を解くのに見ほれたり、自分の方が早く解けたと喜んだりして楽しんでいます。

クイズというと、対面で早押しする形式が有名ですが、最近では「パズル」「頭脳ゲーム」「脳トレ」「謎解き」など様々な形式があります。その中でマイブームが「脱出ゲーム」です。体験型謎解きゲームともいわれ、自分が主人公になりきって謎を解き問題を解決する形式です。ロールプレイングゲームにちょっと似ています。まず舞台があり、その世界にはいくつか設問（クエスト）があります。一つを解く（クリアする）と次の問題がでてきて、それをクリアするとまた次がでてきて、といった具合にだんだん進んでいき、最後の謎を解いて終了です。毎回舞台の世界観に合わせたストーリーがあります。「手がかりを集めて密室から脱出する」「証拠を集めて犯人を見つける」「宝を集めて世界を救う」などでしょうか。

初めて私が「脱出ゲーム」に参加したのは大阪のユニバーサル・スタジオ・ジャパンのアトラクションイベントです。当時中高生の子ども2人と夫と家族4人で参加しました。特にクイズに思い入れがあったわけではありません。生意気盛りの中高生と遊園地についても、趣味が合わず間が持たないから何かイベントを入れよう、くらいの思惑でした。結果は大あたりで家族で大変楽しめました。舞台はアメリカのテレビ局で、見学に行くとテロにまきこまれ、殺人ゾンビウイルスが蔓延する中、謎を解いて時間内に脱出する、というものでした。セットのテレビ局が大変よくできていて（本物を見たことはないですが）、4階建ての立派な建物で、研究室などもそれっぽく、パスワードを入れてドアを開ける時など大変ワクワクしました。謎はすぐに解けるものもありましたが、なかなかひらめかず、結局時間切れでゾンビになってしまいバッドエンド、脱出失敗でした。しかしながら悔しい思いをしたからか、かえってハマってしまい、それ以降「脱出成功」を目標に何度も家族で挑戦しました。子どもも喜び面白がって積極的に参加してくれて、親子コミュニケーションに悩んでいた親（特に夫）にはよかったようです。

遊園地のような大舞台以外の小さい会場でも行われて



ゲーム「ドラゴンクエスト」を模した世界でキャストと記念撮影



淡島にて、某有名アニメコンテンツとのコラボレーションです

おり、気軽に参加できます。小会場ではテーブルとイスと謎解きアイテムがコンパクトに設置されていて、あまり歩き回ることなく座って楽しめます。規定参加人数は4人から6人くらいで、家族連れ、仲間、研修、合コン(?)などで利用されています。アニメや映画、ゲームとのコラボも多く、そちらのファンが参加することもあるようです。

世代は20代が多い印象です。内容によっては小学生も老人も見かけました。皆さんそれぞれ楽しんでおられました。

ゆっくり一人で「脱出ゲーム」を楽しみたい方には書籍版、ゲーム機版、スマホアプリ版があります。私のおすすめは書籍版です。付録がついているからです。ゲーム内容にそった「手紙」「新聞」「人形」「コイン」などいろいろな謎解きアイテムがついていて、リアル感があります。また、本そのものにも、細かく謎が隠されているのでそれらを探るのも楽しみの一つです。

ぜひ皆さんも謎解き脱出ゲームに挑戦してみてください。

Movie V

高橋泰英

高橋皮フ科クリニック (横浜市中区)

『アリー／スター誕生』

ロックスターに見いだされたヒロインがスター街道を上り詰めるのと反対に、彼は凋落していくという悲劇。1937年の1作目以来3度目のリメイク。2作目がジュディー・ガーランドとジェームズ・メイソン、3作目がバーブラ・ストライザンドとクリス・クリストファーソン、そして今回はレディ・ガガとブラッドリー・クーパー。彼の初監督作品であり、歌も本職顔負けの上手さ。終盤近くアリーと話す時の目の演技も秀逸。勿論ガガも輝いている。音楽映画として『ボヘミアン・ラプソディ』よりもこちらの方が好き。

『ギルティ』

市民からの相談電話に、車で拉致されているらしき女性からの通報が。家に残された子供にも何か異常事態が起きているらしい。事件解決までほぼ主人公の警官の顔のアップと、通話相手の声だけなのに、凄い緊迫感！

北欧サスペンスは外れが少ない？ 「事件は会議室で起きているんじゃない、受話器の向こうで起きてるんだ」

『グリーンブック』

黒人ピアニストと、ドライバーとして雇った元クラブの用心棒とのロードムービー。アメリカ南部の演奏ツアーは、厳しい人種差別に満ちていた。『ロード・オブ・ザ・リング』のアラゴルン役など、常にクールでスマートが売りのヴィゴ・モーテンセンが、締まりのない体、がさつで陽気なイタリア系アメリカ人によくも化けた。人種差別を声高に批判するのではなく、育ちも資質も人種も異なる二人の交流をユーモアたっぷりに語っている。予想をちょっとだけ外したラストが心地いい。

『運び屋』

毎年1回は登場するクリント・イーストウッド監督作品。87歳の男が麻薬の運び屋をしていたという記事か

ら作られた、大人のおとぎ話。麻薬カルテルのノルマが徐々に厳しくなり、麻薬捜査官から狙われるつらい立場のはずが、残りの人生を楽しんでいるかのような飄々とした主人公。久し振りに主演のイーストウッドが楽しそうに演じている。

『ヴェノム』

『アイアンマン』『スパイダーマン』などで知られるマーベル・スタジオの実写映画。あの手のものは最近敬遠していたが、これは例外的に面白かった。ヴェノムのキャラが魅力的なのと、主演のトム・ハーディの存在感のせい。矛盾するようだが、彼は毎回出演者の名前を見るまで、誰なのかわからないことが多い不思議なカメレオン俳優。

『ジョーカー』

『バットマン』シリーズの悪役スター、ジョーカーの誕生譚。コメディアンを目指す、うだつが上がらず路上で宣伝マンとしてピエロを演じている青年が、社会から虐げられた末に悪のヒーローに変身する。暗いトーン、狂気じみた振る舞い、残虐な行為などが続くが、最後に彼が飛翔する階段のシーンは、楽曲の効果もあり、ある種のカタルシスを覚える。『グラディエーター』以来ずっと応援しているホアキン・フェニックスがついにアカデミー主演男優賞を受賞したことを喜びたい。

『ふたりの女王 メアリーとエリザベス』

スコットランド女王メアリーとイングランド女王エリザベスの対立、嫉妬、共感と、周囲の陰謀を濃密に描いて飽きさせない。この手の時代劇としては最高に面白かったかも。旬の女優シャーシャ・ローナンとマーゴット・ロビーの演技合戦や、衣装・舞台装置も見どころ。

『アラジン』

ディズニーアニメ『アラジン』の実写版リメイク。アニメ版（ランプの魔人ジーニーの声がロビン・ウィリアムズ、惜しい人を亡くした）のファンの期待を裏切らない出来。ジーニーに魅力がないと成り立たない話だが、ウィル・スミスは実に適任。ジジイの私も、しばしファンタジーの世界を飛び回った2時間。

『工作 黒金星と呼ばれた男』

北朝鮮に侵入した実在の韓国諜報員“黒金星”の諜報活動を凄く緊迫感で描く。韓国大統領選に北朝鮮が介入していたなど、彼の国の事情に疎い私としては驚愕。黒金星役のファン・ジョン・ミンと北朝鮮の外資獲得の責任者役のイ・ソンミンの存在感が圧倒的。涙腺の弱い私は、最後にまたしても落涙。

『翔んで埼玉』

埼玉をバカにしまくっているが、埼玉愛を感じる(?)。埼玉県で大ヒットしたというのがその証拠か。全編下らないので、こりゃ駄目だと思った人は途中で止めていい。

『イエスタデイ』

売れないミュージシャンが事故から目覚めたら、世界からビートルズが消えていた。自分だけが数々の名曲を知っている。さあ、どうする？ 名曲の数々を聴き、ビートルズに因んだ場所をみるだけでもファンとしては浮き浮きしてしまう。他にも超有名なものいくつか消えているのも楽しい。一番ジーンとくるのは、孤独が解消される場面。まずい、ネタバレか。『未知との遭遇』のラストに近く、デビルスタワーにUFO目撃者が集まるシーンと重なった。

『それだけが、僕の世界』

さえない元ボクサーの兄とサヴァン症候群の弟の物語。イケメン・アクション俳優のイメージが強いイ・ビョンホンだが、実は大変な名優だということを再確認。そして弟役のパク・ジョンミンの演技とピアノ演奏にも脱帽。こういう泣かせる映画は韓国が一番。無理に泣かされたという感触がない！

『12か月の未来図』

エリート校から問題児の集まる中学に赴任した教師と、移民や貧困などの問題を抱えた生徒との交流を描く。あまりに違う環境に戸惑いながらも奮闘する中年教師の姿に拍手。人間、幾つになっても成長出来ます。

『パリ、嘘つきな恋』

他界した母親の車椅子にたまたま座っていたため、身障者と誤解されたプレイボーイの主人公が、バイオリニストでもある車椅子テニスプレイヤーの女性と付き合うことに。真実を打ち明けられないまま、本気で好きになってしまう。どうなるこの恋。笑って胸キュンとなるフレンチ・ラブコメの王道。ディナーの場面にうっとりすること請け合い。

『ロケットマン』

『ボヘミアン・ラプソディ』に続くゲイミュージシャンものと言ったら身もふたもないが、エルトン・ジョンの曲は本当に名曲ぞろいだと今更感心。音楽的に成功した一方で、麻薬・アルコール依存症やゲイであることに苦悩する中、生涯の友となった作詞家バーニー・トーピンとの関係性が切なくも温かい。『キングスマン』シリーズのタロン・エジャトンが吹き替えなしで、本人からもお墨付きをもらった熱唱を披露。

『COLD WAR あの歌、2つの心』

冷戦下のポーランドで出会った歌手とピアニストが恋に落ち、別れと再会を繰り返す15年間。少ない説明と白黒の画面がとても新鮮。すべてを理解したとは言えないが、観終わった後には何かが確実に残った。写真でもそうだが、モノクロの画面は驚くほど明るくそして暗い。そのコントラストが素晴らしい。

『火花』

ピース又吉の芥川賞受賞作の映画化。売れない漫才師たちの青春ドラマ。主演の桐谷健太、菅田将暉の大阪弁が心地よく、大多数の意見とは真逆だが、小説やNHKドラマより断然こちらが良かった。漫才師「2丁拳銃」の川谷修士はツッコミの上手さで定評があるが、演技も秀逸だった。

